

## アイラ島再び（その3） 佐伯 順弘（岐阜県）

## DAY5-6 (12-13AUG2016) アイラ島滞在。

・蒸留所巡り

・ウィスキー三昧

## DAY5 (12AUG2016) アイラ島滞在。

0000 覚醒。まだ寝る。

0643 起床。西の風 風力不明 曇り時々雨

アイラ島到着3日目。今日は蒸留所巡り。

0742 朝食。まともな食事は基本的にこのフルブレックファーストだけにしようと思う。余計なカロリーも、余計な出費も極力抑えるのがこの旅のスタイルである。栄養吸収後の残渣の廃棄などを終え、ここで予定の詳細を正式決定する。

Bruichladdich Pier まで 1005→1026 のバスで行くことにする。帰ってこられる最終のバスは Bruichladdich Pier から Bowmore co-op まで 1647→1708 であることも確認した。今更説明の必要もないが、Bruichladdich Pier は、有名な（アイラ島の蒸留所で有名でないところなどない。2016年現在はまだ建設途中で製造開始 2018年の Ardnahoe でさえ、知られているくらい。）Bruichladdich Distillery（ブルイックラディ蒸留所）近くの埠頭である。また、今回起点としているのが Bowmore co-op というバス停があるボウモアである。生協の前にバス停があるので、買い物、お出掛けに至便である。

今日の研修前に、行動用財布に軍資金を追加する。150GBP 追加で計 239.2GBP（現在のレートで 35500 円ほど）を懐に入れて、今日の研修へ出かける。



1005 「No.450」バスで Bruichladdich Pier まで。1033 バス停着。2.6GBP。1035 蒸留所正門着。ピジターセンターへ。蒸留所見学ツアーは 1400！ま、こういうことも想定内なので特に驚くに値しない。分刻みで観光地を回る旅行ではない。気ままな旅をしているのである。ピジターセンター内のショップを見て回る。多くの種類と数のボトルがずらりと並ぶ。その一角に透明なボトルが輝いていた。「BOTANIST」。

ボタニスト、植物学者という意味らしい。22 種類もの薬

草を入れたジンである。ウィスキーとは関係ないように思われるが、蒸留酒であることは同じであり、当然ながら施設、技術も同様のものなので作りやすいはずである。それよりも重要なことは名前である。このボタニストの綴りをもう一度素直な目で見てほしい。

そこには BOTAN（ぼうたん＝冒探＝冒険探検部）+IST（「…する人」「…を奉ずる人」「…主義者」「…家」）が見えてこないだろうか。すなわち、これは冒探の公式飲料であるのだ。それまで、冒探の公式飲料（であると、勝手に認識していた）はズブロッカと一升瓶にはいった五ーワインである。そこにまた、新たな公式飲料が加わっているのである。それを製造しているのがアイラモルトとして素晴らしいウィスキーを世に送り出しているブルイックラディというのもうれしい話ではないか。



それにしても、時間があまりすぎるので近くにカフェでもないかと探してみると、ありましたよ。Bruichladdich mini market というちょっとしたショップとカフェが併設された店。カプチーノがフォームドミルクテンコ盛りで想定外の旨さ。ついでに頼んだサンドイッチもホットサンドでこれまた旨い。余計な出費はおさえるようにしているが、時間を楽しむための出費は問題ではない。読書をしつつ、穏やかな時間を過ごす。外は小雨。しかもいわゆる氷雨というやつで本気で寒い。日本でいうと 12 月の寒さといっている。軽量コンパクトなフードつきのアウターが必要である。もちろん、防水機能を有するものでなければならない。今回は、防水でないパーカーしかもってこなかったため、このカフェのように温かい場所はありがたい。

かなり長居をした。

1400 蒸留所ツアーの客でいっぱい。この蒸留所は多くの人々が注目しているのだろう。テイस्टィングで味わったウィスキーを買っていこうかとも思ったのだが、動きが鈍くなるのでやめておく。説明は 1/4 程度わかったかどうか

かだった。もっと聞き取れるつもりでいたのだが、スコットランド訛のためか、英語の修行を怠ったためか…。おそらく後者であろう。語学は日常的に使わないとどんどん衰える。事実、中国語もかなり衰えたと感じる。英語や中国語の曲を積極的に聞いているのだが、それだけじゃなあ。状況に応じて自分の考えを表現して、それに対する反応によって学んでいかないとだめだなあと痛切に感じる。折角、旅で覚えた言語も悉く消えていく。残念なことだ。ツアーは1時間ほどで終了。5GBP。

ショップでBOTANISTのラグビージャージを購入。サイズ40と42のサイズで大いに迷ったが、42で成功だった。こういう時の判断は概ね正解であることはありがたい。旅先での判断は一時的に誤ったかと思われることでも最終的には正解であることが圧倒的に多い。そうでないことは思い出せないくらいである。こういうときに神への感謝を大切にしたいと思う。BOTANISTのミニボトルと合わせて50GBP

(現在のレートで約7400円)

1655 約10分遅れて、バスが来た。終日小雨で薄暗くなってきていたので、かなり心配していたのだが、無事来てくれてよかった。2.6GBP

1714 ホテル着。バスはやたらぶっ飛ばして20分もしない内に、ボウモア生協前に到着した。薄手のパーカーが湿っていたので、着替える。絵葉書をかいたり、記録をしたりして過ごす。

1918 夕食へ向かう。まずはシードル3.7GBP。シードルはフランス語なので、サイダーといった方が正確か。こちらはビールの他にもこのシードルをよく飲む。日本で売られるサイダーの元になった飲料らしい。しかし、こちらはリンゴの発泡酒で日本のサイダーとは全く違う。以前、ロンドンでストーンロングボウというのを飲んだのがシードル再認識の始まり。まだ、研究に熱中するほどではない。次に銘柄も知らないビールをサーバーのラベルだけで選んでオーダー3.6GBP。アルコールばかりではいけないと思い、F&C(フィッシュ&チップス)をオーダー。こちらは部屋につけられた。テイスティングと寒い中の移動が続いたため疲れたのだろうか。これだけでもう十分だった。

2100 部屋に戻る。シャワーを浴びて、寝る。

## DAY6 (13AUG2016) アイラ島滞在。

0300 覚醒。また寝る。

0730 起床。曇り

アイラ島に到着4日目。今日も蒸留所巡り。

0830 朝食。フルブレイクファースト。夕食を軽くしているので、朝からしっかり食べられる。朝食後部屋に戻って、今日の予定を決める。昨日はアイラ島の西方面にあるBruichladdichへ行った。今日はアイラ島の東側にある3つの蒸留所をめぐる。宿泊しているBowmoreはアイラ島の中央付近にあるので、昨日とは反対側への研修である。この3つの蒸留所はそれぞれ1.5kmほど離れているだけで1つの地域にあると言ってもいい。Bowmoreからバスに

乗り、一番遠いArdbegで下車し、そこから徒歩でLagavulin, Laphroaigと巡る計画。そして、

Port Ellenまで行き、そこからバスでBowmoreまで戻る。

1020 バス乗車。2.95GBP

1053 Ardbeg Distillery (アードベッグ蒸留所) 到着。ところが、ここで問題発生。蒸留所見学ツアーが満席だというのだ。残念。(しかし、これが後に素晴らしい出会いにつながるが、それはまた次の旅の話である。) 次の回のツアーにすると、時間がずれて最終的に帰るバスが無くなる恐れがあるため、今回は断念した。ま、残念であるがどうということもない。カフェでコーヒーでも飲むかとOld kiln caféへ。コーヒーを飲んでいると、目に入ったのはExpress table tasting 15GBPだ。だがしかし、1対1で説明されても、昨日半分もわからなかったのだから、残念なことになるのが目に見えていた。正しい判断で止めておいた。なんでもやってみればいいというものではないのだ。十分理解できないのに、説明だけさせるなんて愚かなことだ。そんなことを考えつつ、次のLagavulinへ向かう。この地域にある3つの蒸留所はThe Three Distilleries Pathという遊歩道でつながっているのだから、快適な散歩ができるのである。朝の曇り空が嘘のように晴れ渡り、花々が咲き乱れ、温かい風(8月なんだから暑くてもいいのだが)が心地よい。遠くに海岸が見える遊歩道をのんびりと歩く。車道沿いではあるが、多くが石垣で分離されており、安全性は問題ない。しかも、ところどころに寄付されたベンチが置かれ、景観を楽しんでほしいとのプレートまでつけられている。

前後には人はいない。気分の良い一人旅の瞬間である。人と会うのは好きだが、こうやって自然と素直に向き合う時間は貴重だ。登山としているときも、長距離走をしているときも、自然と自分自身を楽しんでいる気がしている。最近ソロキャンプが流行しているのも人々がそういうことの大切さに気づき始めた部分もあると思う。もちろん、部分というだけで、全部だとは思っていない。人と交流することが苦手な人や面倒くさいという人も少なくないことはよく知っている。人と対等に付き合うということは、自由を制限するということだから、気遣いとか我慢とかいったものが必要になってくる。自分の自由を全開放したなら、相手と対等・平等にはならない。では、自由と平等は両立しないかというところがある2つの条件によって成立する。それは知性と品格である。相互安全保障、そして、人と人の間に生きているという感覚、慎みの感覚、それを「自分を律するもの」として身につけているかということだ。

きっと多くの人が身につけずに生きているのだろう。私の同僚の9割、生徒たちの5割はそういった感覚をもっていない。大人の方が傍若無人に生きている。それが指導者にも保護者にもなっていない中途半端な者たちの現状だ。いやいや話が暗くなった。1人でいるとそういった内なる旅にどんどん進んでしまうが、いやではない。散歩も長距離走もあつという間に終わってしまう。

という間に、2つ目の蒸留所 Lagavulin に到着である。この蒸留所で作られるウイスキーもかなり好きなのだが、この時はほとんど見学者がいなかった。テイスティングしたいのだけれど…と話すと、ここでゆっくりしていったと1杯おこってくれた。



冬ならば、火が入るであろう暖炉の部屋。ゆったりとしたソファが心地よい。説明よりもまず飲めという姿勢が潔い。そりゃ旨いはずだ。

多くの蒸留所は船への荷積みを楽しむためだろうか、海沿いにある。蒸留所から海が見えるデッキに出る。明るい青の空、深い青の海、そして、そこに流れ込む茶色の川。(大地を覆うピート層のため、川は茶色になる。ピートの説明は改めて…) ここから世界に向けて荷積みをしたのだろうか。ここ Lagavulin Distillery (ラガブーリン蒸留所) は 1816 年創業で 2016 年の今年は 200 周年だったらしい。200 周年の企業がこうして今も必要とされていることが素晴らしい。ロゴ入りグラスを1つ買って、蒸留所を後にする。

わずかな酔いととも、のんびりと散策する。次は 1.6 km 先の Laphroaig Distillery (ラフロイグ蒸留所) である。

車もそれほど通らない。海風が気持ちいい。この遊歩道はまだ新しいのだろうか。補習したのだろうか。アスファルトが新しい。丁寧な仕事だ。丁寧な道路工事は日本だけかと思っていたが、そうでもないらしい。

1344 ラフロイグ蒸留所到着。ここの蒸留所見学ツアーは参加したことがあるので、とりあえずパス。で、まずは土地の借地料を受け取りに行く。既にご存知のこととは思いますが、私はこのアイラ島のラフロイグ蒸留所敷地内に土地を持っている。そう、書類上はそうなっている。それをラフロイグ蒸留所に貸しているのだ。当然借地料が発生する。ビジターセンターの一角にあるマシンに必要事項を打ち出すと、貸し出している場所の地図などが表示された書類がプリントアウトされる。それをカウンターに持って行き、借地料を受け取る。ウイスキー1ショット。ちょっとした遊びである。それでも、自分がアイラ島に土地を持っていると思うだけで、大切に思う気持ちが断然違う。どうやって土地を入手したのかとか、どのくらいの広さの土地なのかとか、そういった野暮なことはここでは書かない。たい

したことはないのだ。ビジターセンター内のショップでラグビーシャツを買う。ブルイックラディでも買ったが、今回は良いものに出会う機会が多い。29.99GBP (約4400円) これで3つの蒸留所を巡ったわけだが、トレッキングはまだ続く。バスに乗る予定の街は Port Ellen (ポートエレン) なのだ、まだ 1.6km ほどある。途中、大きな倉庫を見つける。倉庫についていたプレートには beam suntory とある。ラフロイグ蒸留所はサントリー社の傘下にあるのだった。しかし、ここまで大きな倉庫に何を入れているのだろう。まあ、どうでもいいといえばどうでもいいが、気にならないこともない。結局のところ、どうでもいい。頑張るってよいウイスキーをつくってほしい。人気が出過ぎて、品物がなくなるとは状態にはならないでほしい。品薄と言えば、サントリーの「山崎」「白州」である。原酒がないとのことだが、本当にどこにも売っていない。ネットで見ると信じられない高値がついている。海外でも山崎は知られているのだから品薄にもなるだろうが、飲めないのは大変残念である。

そんなことを考えながら歩いていると、あっという間に Port Ellen に到着である。この街は初めてアイラ島に来たときに宿泊していた街なので、そこそこ詳しいのだ。

1433 若干小腹がすいていることに気づく。ここにも生協があるので、そこでサンドイッチを買う。2.25GBP。水は持っているので、海岸沿いのベンチでゆっくり食べる。わずかに温かい快適な気温、気持ちの良い海風、波の音、鳥の声、そして、旨いサンドイッチ。幸せをかみしめる。

毎回のように書くが、UK の食べ物は旨い。高級レストランにはいかないのですがそのレベルでは知らないけれど、普通にバックパッカーが食べるものは普通に旨いのだ。だから、知りもしないのにイギリスの食べ物はまずいなどとはいわないほうがいい。ついでに、イギリスという言い方さえ最近はずがしいと思うのだから…。その辺りについては前回書いたと思うので、参照してほしい。

1540 街を散策する。以前宿泊したホテルである White Hart Hotel の前の海沿いの庭。そのさきにある Port Ellen Malting。ここは昔蒸留所だったが、ウイスキーの人気がない時期に耐えられず、閉鎖。その後、モルト(麦芽)製造だけを行っていたらしい。最近ウイスキー人気が高まったため、また再開するとの話も聞く。これでアイラ島の蒸留所は 10 か所になるのだろうか。Islay Hotel のカフェにはいる。このカフェは「Tuborg」を置いていることを憶えていた。私が旨いと思うビールの1つであるがこれはUKではなく、デンマークのビールなのである。なぜ、この北の小さな島にツボルグが?とも思ったが、旨いから何の文句もない。安定の旨さを堪能した。

1627 無事バスに乗り込む。2.75GBP。今夜は牡蠣を楽しむことにする。(続く)